

夏の甲子園、地方大会とも中止

涙に児球た絶夢



練習後、仲井宗基監督(左)が選手たちに話をしている。八学光星高校硬式野球部。20日、八戸市。

青森県内

「きょう一日は泣いていい」

球児の夢が、はかなく散った。今夏の甲子園大会中止が決まった20日、聖地を夢見て練習に励んでいた青森県内高校球児の元にも信じたくない知らせが届いた。指導者は「選手を思うと言葉がない」と落胆。球児は「気持ちを切り替え、次の目標に向かいたい」と気を振る舞うなど、複雑な思いが交錯した。普段は球音と元気な声が響く練習場が、この日はやりのない悔しさと悲しみで静まり返った。【1次本記】

「きょう一日は泣いても仕方がない。新しい目標をええわ」。昨夏の甲子園8見つけられない。これが強の強豪・八学光星高で、お前らの真価が問われる。指導官の真摯な言葉を離れ、厳しい練習に励んできた。仲井監督は「甲子園があるから苦しい練習に

耐えてくれた。選手の手持ちを奪えど『し』ようがない、切り替えよう』では「野球の悔しさは野球でしか晴らすことができないと日々伝えてきた。複雑な気持ちだが、選手たちは必ず立ち直り、新しい道に向かつて進んでくれるはずだ」と期待を寄せた。甲子園に出場し、優勝することが自分の使命だと

思ってきた」と話すのは、東京出身の中澤英明主将(3年)。「冬越して打力が向上し、チーム状態も右肩上がりだった。それだけに、春の大会に続いて勝負の夏も中止となり分かつてはいたが、ショックです」と率直な思いを吐露した。代替大会開催は不透明な状況だがもし開催されたら、チームが一つになって頑張る。甲子園から気持ちを切り替えたい」と気丈に振る舞った。

県立八戸高では、練習後のミーティングで品田部大監督(66)が夏の甲子園大会中止を伝えたほか、日本高野連の八田英治会長名のメッセージが配布された。福村亨太主将は「仲間と取り組んできた3年間は無駄にならない。最後まで仲間と共に頑張っていく」ときっぱり。マネージャー 概略話さん(3年)も「みんなが滞りなく野球をできるよ

う、最後までサポートしたい」と話した。品田監督は「言葉をついでない状況だと思つておもんばかる。『今年はユニホームを一度も着いていない。大人たちが、子どもたちに(練習の成果を發揮する)何らかの場をつくらなければいけない』と思いを巡らせた。

県立八戸西高は21日に指導者らと3年生でミーティングを予定。小川貴史監督(36)は「常に最悪の事態を想定してきたが、いき決まると、生徒たちと同じで悔しい」と無念さをにじませた。休校中もインターネットを活用し、工夫して練習に取り組んできたことを踏まえ「しっかりとコミュニケーションを取り、これまで通り部員と向き合っていきたい」と強調した。(金澤千優希 林泰輔)